

僕の背中にある勇気

静岡県 浜松西高等学校中等部 三年

宮本 諒太郎

朝早く友達と通学路を歩いていると、いつもは静かなごみ捨て場に人影を見つけた。一人はおばあさんで、もう一人は僕の学校の高等部の先輩だった。少し面倒くさそうな予感がしたが、やはり二人はカラスに荒らされたごみ捨て場の掃除をしていた。高校の先輩は学校のちりとりを持っていたので、一度学校に行き、戻ってきたようだ

僕はためらったが、そのまま横を通り過ぎるわけにもいかないので、友達と「手伝います」と声をかけ、掃除を手伝った。その日の朝の会で、僕たちの行動が紹介された。名前こそ出されなかったが、おばあさんが学校へ連絡をしてくださったそうだ。僕は少し恥ずかしかったが、あそこで通り過ぎずに掃除を手伝った自分をほめたいと思った。

カラスによるごみ荒らしは決まっていたことなので、今度は僕が友達を誘ってごみ捨て場の掃除をすることにした。友達も快く引き受けてくれた。そうして僕たちは、毎朝の掃除を習慣として続けていた。すると、その活動に学校の近所の誰かが気づいてくれたようで、また朝の会で紹介された。同級生の間でも話題になっていたようだ。いろいろな人から、「すごいな」「えらいじゃん」とほめられた。

しかし、僕はあまりいい気がしなかった。「本当にこれはほめられるようなことなのか」と思ったのだ。はじめ、ごみ捨て場の掃除を手伝ったときは、ためらいはあろうと、「すべき」と思ったから手伝いをした。しかし、今、僕のしている行動は、ほめられたいだけの^{うわ}上^{つら}っ面だけの行動ではないか。いわゆる「偽善」なのではないか、と思ったのだ。そして、そのときから、僕はごみ捨て場の掃除をしなくなった。

掃除を止めた週、いつもより一本遅いバスで登校するとごみ捨て場に人影があった。友達が掃除をしてくれているのだらうと思ったが、それだけではなかった。そこで友達と掃除をしてくれていたのは、今まで見たことのない顔の人たちだった。次のごみの日には、また違う人が二人ほど、そして翌週になると近隣の小学校の先生まで手伝ってくれるようになった。僕たちの行動が周りの人たちの気持ちを動かしたのだと思った。

僕は自分が悩んでいることが、どうでもいいことだと気づいた。善だろうが偽善だろうが、僕たちが行動を起こしたことに意味があるのではないか。偽善を気にせずやってのける「勇気」が大切だったのではないか。そう思いながら、掃除を手伝った。

今、僕の背中の通学カバンには、45リットルのごみ袋が入っている。学校がくれるようになったので必要ではないのだが、いざというとき、きっとこのごみ袋が僕に勇気をくれる。そして、その「勇気」が、僕や周りの人たちの気持ちをつないでくれると信じている。